

特集① 文章特集

超かんたん文章術

書けない人も
ラクラク、
スイスイ!



子どもは勘がいいもので、見よう見まねでうまくまねをします。
一方、大人はどうかというと、変に理屈で考えてしまい、書けなくなったりします。
それでさらに新たな理屈を仕入れ、もっと書けなくなったりします。
よくよく考えれば、文章は小学生でも書けます。しかも、かなり上手に。
ということは、難しい理論は必要ないんじゃないのか。
というあたりから、今回は文章の書き方に迫っていきます。

文章は「書く」もの ではなく「編む」もの

松永暢史

文章に「形式」は要らない

——文章を書くと言つと、まずは起承転結や5W1Hといった形式を思い浮かべますが、そういったことを考えなくても書けるんですか。

起承転結とか5W1Hみたいな制約を最初にはめるとしますよね？ そうすると、内容をどう文章にするかを考えるのではなくて、言われる形式に従って書いていくことになるんです。そういう形式が必要だと思ひ込むから、文章を書くことは難しい、書けないと思つてしまうんですね。そうではなくて、文章を書くというのは、内容を決めてそれを材料にして、そこからどういうふうにするか考えるものなんだから、決められた順番というのには必要ないんですよ。

——それで、作文は、「書く」ものではなく、「作る」ものとおっしゃっているのですか。

そう。文章は、自分の頭の中にある、まとまった考えを書くものではなくて、その要素を抽出して、それをもとに組み立てるものなんです。言いたいことや思

うことをメモにして、そのメモに基づいて書けばいいのに、いきなり一気に文章を書こうとするから書けなくなるんですよ。段階を踏まないで。

——これまでの文章構成の考え方とは、ずいぶん違う気がします。

アートの変遷と同じですよ。アートの歴史では、印象派からシュルレアリスムになって、今日的な抽象的なアートになつてきましたよね。抽象画が一番新しいんです。抽象画を理解しない人は多いですが、僕は抽象画が大好きなんです。

——抽象画にヒントを得た作文法とのことですが？

文章についても、これまでの基準とは違う、新しい作文法に挑戦しようとしてるわけです。それが、強いパンチ力でもって自分の言いたいことが出るように、面白く書く方法なんですよ。

——そうやって文章を「作る」と、誰でも文章は書けるものなんですか。

このやり方さえ知れば誰でも書けます。やれば誰でも上手くなるんだから、いつからでもやったほうがいいですよ。新書や単行本を書いている大学の教授も、既

にどこかにある情報をつないで、その間にコメントをつけてるんです。昔から、有名な学者たちも皆そうですよ。偉い人の学説を切つてきてつなげて、そこに自分のコメントを入れて、本を作つてきたんです。そもそもは、文章というのはそうやって作るものなんです。それが効果を持つようにするのに、編集が必要になつてくるんですね。

誰にでもできる作文法

——「抽象構成作文法」というのは、文章を「作る」方法なんですね。最初にするのが、言いたいことや思ふことをメモする観念抽出という作業ですが、具体的にはどうやっていいんですか。

書きたいテーマについて考えて、思ひついたことを自由に紙に書いていけばいいんです。たとえば、「今、頭に浮かんだことは？」と考えて、それが「パンダ」なら、「パンダ」と書きます。次に、「パンダについてどう思うか？」と考えて、「かわい」とか「食べてみたい」とか、また思ひついたことを書きます。それから、「かわいくて食べてみたいと思うものはほかにはないの？」っていうふうに話を広げて、それをどんどん書いていくんです。

——ひとりで書いている場合、自分自身が質問する側と答える側になりながらやっていったらいいんですか。

それでできると思いますよ。実際にやってみたらいいよね。

——そうやって思ひついたことを、ただどんなメモしていけばいいんですか。

同じメモでも、アイコンとして大きいと小さいのがあります。見出しになるような大きいアイコンを思ひついたら、その周りに小さいのをつけていくのもいいし、矢印で関連させていくのもいい。分類しながら書く人もいますね。

——そうやって、なかなか思ひつけない人もいると思うんですが。

確かにいますね。自分の考えがなかなか出てこないんです。でも、今日は何をしようとか、何を食べようとか、考へたり思つたりすることは、人間にとつて基本的なことですよ。何も考えがないということはないはずだから、最初はゆつくりでいいから、ひとつふたつと思





松永暢史（まつなが ゆき） 1957年、東京都生まれ。教育環境コンサルタント、能力開発インストラクター。受験指導を行う中で、『音読法』や『作文法』など、独自のメソッドを確立。『常識破りの日本語文章術』（主婦の友社）、『超音読法』（扶桑社）など著書多数。ブイネット教育相談事務所主宰。

いつくようにして、だんだんだんだん思いつくことを増やしていくようにすればいいと思うんです。作家だってね、書くまでに腹案を練って長い時間かかる人と、ちよつと腹案を練ったらすぐ書き始める人というわけですね。書きながら腹案を練る特異な人もいるだろうし。だから、思いつかない人は思いつかない人なりに、ひまなときに思いついたことを一生懸命メモにするとかして、机の上だけじゃなくて、ほかの時間にもテーマについて考えていると、やがてふつと変な角度から頭に浮かぶから、それを書くようにすればいいんですよ。

適当にメモをつなげていく

——思いつかないというのは、気持ち的に萎縮している面もあるんでしょうか。

あるでしょうね。だからね、少しでも増やせるように、どんなところでも自由に発想すればいいと思うんです。もし思いつくことが全くなければ、私たちは次の行動もできないことになるからね。でも、そんなことはないですよ。ただ、そうやって思いついたことを強く意識することができないのかもしれないから、できるだけ思いつくことを意識したり、友だちと話したりする、いいと思

います。「こんなことがあるんだけど、あなたは どう思う？」と友だちに聞いてみるとか。誰かが自分とは違う意見を言うのと、面白いことに一度に三つぐらいアイデアが浮かんだりするようなことがあるんですよ。そういうふうに頭に浮かぶことを一生懸命考えたいと思います。

——次に、そうやって思いついたメモから短文を作って、それを自由につなげていくわけですね。

メモの中から、まず番号をつけて、どいういう順番だと書きやすいか、何を最初に書いたら面白いと考えればいいんです。これだとつまらないかなとか、当たり前すぎるんじゃないかなとか、そんなふうに考えてください。メモを全部使わなくてもいいし、これぐらいでいいからいいんじゃないかなと思つたら、それで終わりです。

——自由につなげるとか、適当につなげると言われても、なかなか決められなくなりそうです。

読んで面白くなるようにつなげればいいんですよ。文章を適当に切って、適当につなげばいいんです。カットアップという方法ですね。それで、前の文章にこの文章をつなぐと上手くつながらないと思つたら、間に「しかし」を入れようかなとか考えてみる。それだけです。

——どの接続詞を使えばいいかというのは、文章を書くうえで難しいポイントで

すよね。それは感覚的にわかってくるものなんです。

作文を何回も書いたり、多くの文章を読んだりすることによって、身についていくことですね。そこはトレーニングだし、盗めばいいんですよ。文章の極意は盗むことですからね。

どどのつまりを入れる

——そうやって上手く並べられれば、文章は上手くまとまるんですか。

ひとつコツがあつて、どどのつまり、というのがあるんです。観念抽出を全部し終わった後で、このテーマについて言いたいことはどういうことなのかというのをまとめるんですよ。実際に文章を書くときは、それを起点にして書くか、そこに収束するように書くのか、どちらかにします。さらに、最後まで文章を書いて、どどのつまり、最後まで文章を書いた、どどのつまり、まだカッコよく終わった感じがしないときは、最後に詩をつけたたり、短歌とか俳句をつけたり、いろいろやる、いいですね。

——観念抽出をすると、何が言いたいかというのは自然に見つかるんですか。

観念抽出をして、その中で共通点を引っ張ってきて頭の中でまとめて、短く言うところなるというのを考えればいいですね。それで柱になるものが見つかります。それを文章の中に入れておくと、読





んだ印象として、文章がまとまった感じになるわけです。

——そうやって文がつけられたあとに、文体を整えていく作業に入るんですね。

そこは教えてもらわないとできないかもしれないですね。たとえば、「だつた」と書いてるのに、次の文では「ました」と書いているときがあったりもしますよね。それは統一したほうがいいと教えてもらえばいいと思うんです。ほかにも、「思う」「思う」「思う」と、同じ文末が三回連続で続いているから、ひとつを「感じる」にしたらいいか。それを教えてもらえる機会のない人は、他の本を参考にするといいかもしいですね。

——ひとりて書いている人は、自分の文

章を見て指摘されることも少ないと思うんです。そういう人はどうすればいいですか。

一字一句大丈夫かなっていう目で見返すことが必要ですよ。多くの人はそうしないようですが、画家は絵を描いている間に時間をかけるか、描き終わるまでの間に何回も見ること、時間をかけているかと言うと、圧倒的に見ることに時間をかけているわけなんです。特に抽象構成の画家はそうです。だから、何回も読み返すことが重要です。書くのにかかった時間よりも、読み返しをするのに時間を使っていないと、作家になれないよって僕はよく言っています。この文章が上手いっていつているのかどうか、これでOKなのかどうか、自分で確認するための時間ですね。写真は変えられないけど、文章だったら消しゴムで消して直せるし、付け足しまでできるんだから。特にパソコンで書いている人は、もっと簡単ですよ。切って、上に貼って、付け足すのも自由自在だから。「抽象構成作文法」は、パソコンで文章を書くのには、特に向いていると思いますね。

文章は面白いのが一番

——文章を書くにあたっては、どういう意識で臨むのがいいんでしょうか。

作文は料理と同じなんです。料理を作るとき、台所や冷蔵庫にある材料で、

できるだけ美味しくなるように作りますよね。それと同じで、文章も面白くなるように作るんです。面白がらせようっていうのが前提。面白くなかったら、三行先は読んでももらえないですからね。読んでいる時間が楽しくてよかったというふうにしなくて、作る意味がないと思いませんか？ 作品なんだし、読み手へのプレゼントなんだから。

——では、「抽象構成作文法」を用いる以外に、文章を書くために、何かするといいいことはありますか。

いい文章をよく音読することは、文章を書くうえで大切な要素になりますね。兼好法師も紫式部も清少納言も井原西鶴もそうだけど、文章が上手い人は、子どもの頃からいっぱい音読してるんです。夏目漱石も森鴎外もそう。ベースにちゃんと日本語の名文の音読があつて、それが入ってなきゃいけないんです。その言語の特性を体得してるかが大事になってきます。古典からずっと音読をやっていると、日本語がどのように変化してきたのか、というよりも、どのように変化しなかったのか、というのがわかるから、自信を持って日本語のリズムで書けるようになるんです。

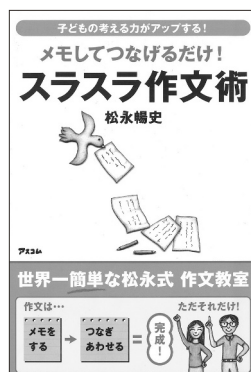
——それは黙読ではダメなんですか。

ダメですね。音読を繰り返したあとに黙読に移るということがあります。最初は音が入らないとダメです。大人の人がやってても効果がありますよ。たとえば、

『徒然草』の冒頭の一文を、一音一音切つて、大声で読めばいいだけです。

——文章が書けるようになって、何かメリットがあれば教えてください。

文章を書けるようになれば、メディアを批判的に読めるようになります。というのも、いちいちメディアに書いてあることを信用しないようになるんですね。たとえば、語尾を「かもしれない」にするか、「違うない」にしようかを考えられるようになると、こういうふうに感じさせようとする効果をねらつて文章が書かれているということが自覚できるようになります。それが自覚できるかどうかは大きいですよ。自分で文章が書けるようになると、それがわかってくるんです。



『メモしてつなげるだけ! スラスラ作文術』
(アスコム/1,100円+税)



『常識破りの日本語文章術』
(主婦の友社/1,300円+税)

自由というのは、 ノープランではない

絶対という型はない

文章を書くには型がある、と言われて
います。有名なところでは起承転結
がそうです。これは便利な道具ではあ
りますが、唯一無二というものではな
く、有効な型のひとつに過ぎないと考
えたほうが正解でしょう。

あまり文章を書いたことがない人、
読むということをほとんどしない人の
場合は、起承転結で書けばそれなりに
まとまるでしょう。

しかし、書きなれてくるにつれ、今
度はその型が枷になってきます。形式
が自由な発想を妨げるわけです。

特に短文や掌編、ショートエッセイ
のようなものの場合、型はないと考
えたほうがいい。少なくとも、いつもい
つも「起・承・転・結」がセットにな
ってなくていいです。起承転でもいい
し、起転結でもいい。もっと言うと、
起転でも承転でも転結だっていい。

起承では尻切れのように思えますが、
そういう文章もなくてはなりません。起結
では中身がなさそうですが、始まりが
あって終わりがあがるのですから、これ
でも文章は完結します。

つまり、こうでなければいけないとい
う型はなく、必要なのは、「最後の
一文を書いたときの終わった感」だけ
と言ってもいいです。

理屈では書けない

しかし、そう言われても、原稿用紙
を目の前にして頭が真っ白になってし
まうこともあるでしょう。

書きたいことがあるような、ないよ
うな。なくはないけど、順序よく、ま
とまった形では出てきてくれない。
そういうときは型のようなもの、



数値を代入すればたちどころに名文が
完成するような形式があったらいいの
にと思い、指南書にあたったりします。

そこには「なるほど、そのとおりだ」
と思わせてくれるヒントがたくさん書
かれていていると思います。

でも、「なるほど、そのとおりだ」
とは思えても、これがまたそのとおり
には書けなかったりします。「なるほ

ど、そのとおりだ」という方法論はだ
いたいが理屈だと思えますが、文章と
いうのは理屈では書けないものだから
です。少なくとも、いい文章、おもし
ろい文章は理屈では書けません。

たとえば、自由にダンスをするとし
ます。そのときは「右足を出して左足
と交差させて」などとあまり頭では考
えないものでしょう。体が覚えてい

る動きに任せて、なかば無意識に踊る。
理屈で体を動かしているわけではない
ですし、変に頭で体を動かそうとすれ
ば、とたんに動きがぎくしゃくするは
ずです。

文章にも似たところがあって、書け
ないと型が欲しくなりますが、そうし
て頭で考えてしまうと余計に書けなく
なってしまうことはあります。

書く前に素材を並べてみる

では、どうしたら自由に書けるかと
いうと、考えなくても話を完結させら
れるくらい読むということに尽きます。
それしかないと言ってもいい。

ダンスだって、最初は誰かが踊るの
を見て、それを直感で真似ることから
始まったはず。

書く場合も同じです。読んで、真似
をするお手本を自分の中に作る。これ
は絶対的に必要です。

ただ、読むと言っても、いきなり大
作を書くというのでもなければ、そ
んなに大げさな話ではありません。普
通の読書経験があればOKです。

それからもうひとつ、書く前に、頭
にあることを書き出すこと。

原稿用紙を前にして、うんうん唸っ
ている人は、書きあぐねているとい
うよりは、準備不足でしょう。

何も考えずに書き出して、気がつい
たら完璧に仕上がっていた。それがで
きればいいですが、普通はそうはいき
ません。頭の中にある素材を紙の上に
並べてみて、どれとどれを使って、ど
んな料理を作ろうか、じっくりと考
えてみる必要があります。

自由に書くというのは、型にとらわ
れずに書くということであって、ノー
プランということではありません。

抽象構作文法 松永先生の生徒さんの場合

連想法で素材を集める

ここでは、松永暢史先生が実際に作文の指導をした例を取り上げます。

作文を書いてくれたのは、本田賢人くん（仮名／小学六年生）です。

松永先生は、作文を書かせる前に聞き取りをします。聞いて尋ねて、なるべくたくさん素材を集めるわけです。

図1は、聞き取りをした際、松永先生がメモをしたものです。

このメモは、今回の特集を組むにあたってお借りしてきたものです。編集部は現場に立ち合っていないませんが、メモから逆算すると、こんなやりとりがあったものと推測できます。

松永先生「賢人くんは兄弟はいるの？」

賢人くん「うん、姉と妹、それから妹の下に弟が二人います」

松永先生「賑やかだろうねえ」

賢人くん「ていうか、ケンカばっかり」

松永先生「誰と誰がケンカするの？」

賢人くん「ぼくとエリカ」

松永先生「エリカというのは？」

賢人くん「妹。三歳下なんだ」

松永先生「どんなケンカをするの？」

賢人くん「あいつ、チヨー自己中心的なんだ。くだらないことでいきなりキレるし、すぐに手を出す」

松永先生「バトルだね」

賢人くん「髪の毛を引っばったり、けつたり、つねったり」

松永先生「学校でもそうなの？」

賢人くん「それが外では正反对なんだ。近所のオバサンにも評判がいい。まったくサギだよ」

ここでは先生が素材を引き出してくれています。一人て文章を書く場合は、一人二役になって話を転がしていけばいいでしょう。

あとは適当に並べるだけ

図2は、賢人くん自身が書いたメモです。まず、まん中に、テーマを書きます。そのあと、テーマから連想されることをまわりに書いていきます。

メモをしながら、同じような内容のものをグルーピングしたり、グルーピングした

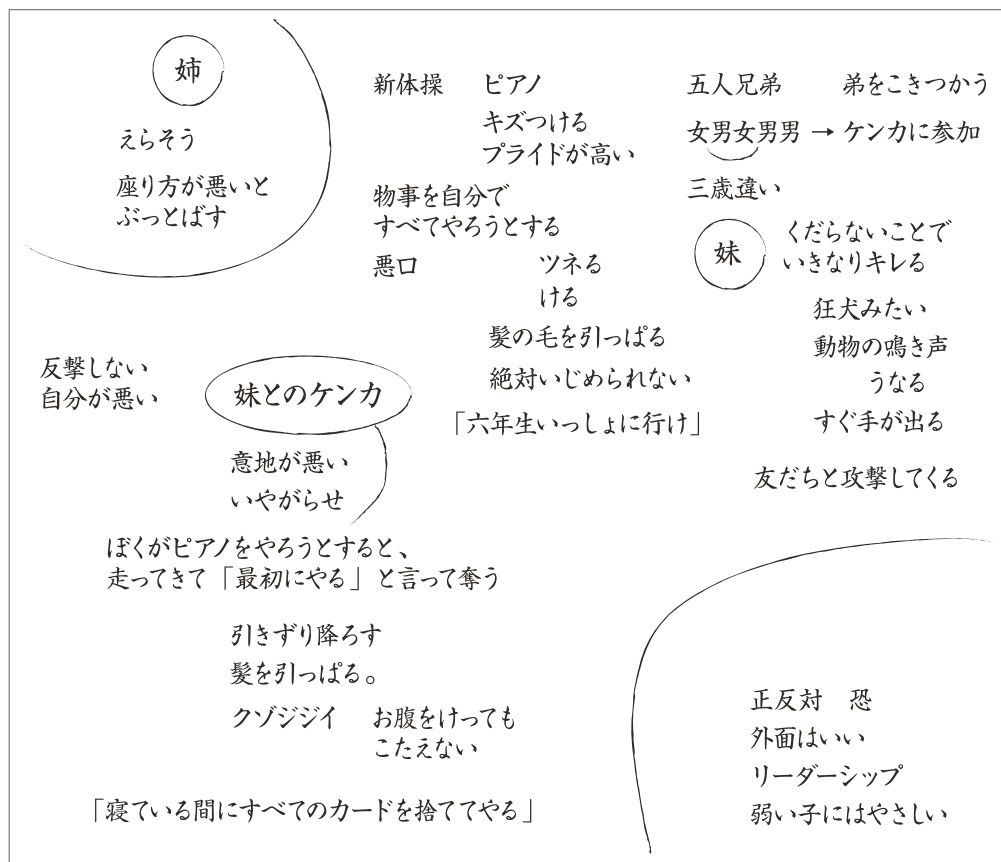


図1 松永先生が賢人くんに聞き取りをして書いたメモ

ものに見出しをつけてもいいです。あとは、これを適当に並べてつなぎ合わせます。話の順番に決まりはありません。皆さんがいいと思ったものはすべて正解です。ここであまり堅苦しく考えると、気持ち

ちが萎縮します。おもしろければなんでもいい、というくらい気楽に順番を考えましょう。

うまくつながらない場合は、言いまわしを変えたり、間に何か一文を足したりします。あるいは、どうにも嵌まらな



気分のいいときには
やさしくしてくれる。
気分の悪いときには
いきなり人のものを奪ったりする。

「クゾジジイ」
「メガネザル」

おばあちゃんの部屋のコンピュータで
自分がゲームのサイトを開いたのに、
ぼくのせいにしようとする。
→ わざわざそれをお母さんに言いつける。

いきなり「二つちに来て」と
言われて行ったら、スカートを
準備して、ぼくにはかせようとしてきた。
いやがると、カブくではかせようとしてきたので、高いところに登って
逃げていたら、枕を投げて
落とそうとした。

妹

いいこと……
何かのはじめの日は、やさしくしてくれる。
↓
六年生として立ててくれた。
↓
むかつく。なんかたくらんで
いるような気がする。

でも、いないと面白くない。

むかつく。
いつも何かをしにかけてくる。
何かを狙っている感じ
(考えすぎかも)。

自分の考えを押し通す。
人の意見を聞かない。
思い込んだらそのまま突き進む。

エリカに対して注意したら、
逆に自分の悪い口を言って攻撃してきた。

図2 賢人くん自身が書いたメモ

ぼくの妹



本田賢人

ぼくは五人兄弟で、姉と妹が一人ずつ、弟は二人います。弟のことはともかくとして、姉は置いてあるお菓子を片っぱしから喰い荒らすブタの生まれかわりのような女です。しかし、この兄弟の中で一番恐ろしいのは三歳年下の妹のエリカです。

エリカは物事をすべて自分でやらないと気がすまないチョー自己中心的で猛獣のような女です。エリカはくだらないことでいきなりキレます。そしてすぐに手が出ます。

エリカの得意技は、まず髪の毛を引っばって、それがきかないとけり始め、それでもきかないと、今度はつめを立ててツネツネきます。ぼくがこれにたちむかうと、まるで狂犬みたいにうなりながら、ものすごい顔で倍の力でツネツネきます。

この前、ぼくがピアノを弾こうとすると、いきなりエリカが走ってきてピアノのイスにすわって、「私が最初にやる」と言っていて、私が技なので、ぼくが何とか引きずり降ろすと、狂犬化して飛びかかってき

ました。ぼくがお腹をけって防戦すると、「このクゾジジイ！ 死ぬ、メガネザル！」と言って台所から包丁を出していかくしてきます。「寝ている間にすべてのカードを捨ててやるぞ！」

簡単に言うと、意地が悪いのである。おばあちゃんのコンピュータでゲームのサイトを開いたのが自分なのに、それをぼくのせいにしてお母さんに言いつける。いきなり「こっちに来て」と言うので近寄ると、ぼくにスカートをかせようとする。ぼくが高いところに登って逃げていると、下から枕を投げてぼくを落とそうとする。

妹はこわい。いつも何かをたくらんでいるような気がする。妹は気が強い。自分の考えを押し通す。人の意見を絶対聞かない。

しかし、実はもっとも恐ろしいのは、外では正対なことである。妹は弱い子にはやさしく、クラスではリーダーシップをとる。成績も良い。近所のオバサンにも評判がいい。これはサギである。ぼくはこのことが一番恐ろしいと思っている。

しかし、もっと恐ろしいことは、妹がいないと退屈なことである。

れば、捨ててしまえばいい。
文章を構成するのは、簡単ですね。
ただ、うまく終われない（終わった感じが
ない）ということはよくあります。
このようなときのために、まん中に書いたテーマの下に、「結局、何が言いた

いのか」をメモしておきましょう。最後にそれを書けば、あら不思議、話はちゃんと終われます。
では、実際に賢人くんがどのようにまとめたか、下記の作文を読んでみてください。



抽象構成作文法 本誌読者の鈴木さんが挑戦

作文の過程を大公開

鈴木さんが選んだテーマは「私の性格」。これをもとに、思いつくことをメモしてもらいました。

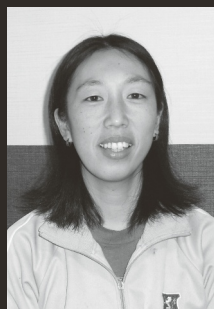
- ①子どもの頃から内気。
- ②B型のわりに意外と？几帳面。
- ③まじめ。長所であり短所。
- ④一人で過ごすのが好き。
- ⑤どちらかといえば、悲観的。
- ⑥否定されると、すぐに傷つく。
- ⑦度胸があるほうだと思う。
- ⑧自分が話すよりも人の話を聞くタイプ。
- ⑨この性格は父親似。
- ⑩「運命」はあると思っている。
- ⑪ちよつと変わった性格かも。
- ⑫協調性がない。
- ⑬団体行動は大嫌い。
- ⑭好きか嫌いか極端。
- ⑮人の意見を否定できない。
- ⑯自分に自信がない。
- ⑰でも、どこか自信がある。
- ⑱くよくよ考える心配症。
- ⑲老成している。

⑳プレッシャーに弱い。

このメモに肉付けをしてもらいました。

- ①子どもの頃から内気。それは今でも変わらない。三つ子の魂百までと実感する。
- ②B型のわりに意外と？几帳面。多分、母の影響。母はA型だから。A型に近いB型なんてあり？
- ③まじめが長所であり短所。たいていの場合、プラスになるけど、一人で鬱陶気壊しているかなと感じることも。
- ④一人で過ごすのが好き。「うちカフェ」が心安らぐ。もつといいカンジの家につか住む！
- ⑤どちらかといえば、悲観的。どんなさは超楽観的。夫婦ってバランスだなと思う。
- ⑥否定されると、すぐに傷つく。どんな小さな言葉でもダメ。冗談だったとしても、本気では？と勘繰るほど。
- ⑦度胸があるほうだと思う。昔から案外そう。性格なんだな。
- ⑧自分が話すよりも、人の話を聞くタイプ。自分が話して受け入れてもらえなかつた場合を恐れて、こうなったのでは？

- ⑨この性格は父親似。若いときはもつと似ていたと思う。私も少し冷静になり、違いを見つけられるように？
- ⑩「運命」はあると思っている。自分の力ではどうにもできない大きな「流れ」は絶対にあると思う。
- ⑪ちよつと変わった性格かも。自分では普通だと思っけれど、「変わってる」と言われる。案外、よくない意味で。
- ⑫協調性がない。「集団」に反発して疲れた時期もあつたけど、あるとき、無理して合わせることはないと気づいた。
- ⑬団体行動は大嫌い。なぜか、昔から嫌いで、成長するにつれて腹立たしさを感じていた。
- ⑭好きか嫌いか極端。中途半端は嫌い。年取つてだいたい薄らいだかな。
- ⑮人の意見を否定できない。嫌われたくないという思いから。でも今は「傾聴」の意味で良いことだと思っている。
- ⑯自分に自信がない。きつと、親に愛されてると自覚できなかったせいだな。
- ⑰でも、どこか自信がある。根拠はわからない。苦勞したせい？
- ⑱くよくよ考える心配症。考えてもどうにもならないことを「趣味」のように考え続けてしまう。
- ⑲老成している。子ども心に理不尽なことが多かったから、いろんなことを考えて生きてきた。



秋田県 鈴木百合子
(34歳・パート)

最初の段階では、単なる文章作成の一つの手法としてかかっていたんですけど、最終段階で、自分の考えがはつきり、すつきりまとまってきたことがわかって、仕上げの文章が作りやすかつたです。「自分の性格」をテーマとしましたが、でき上がつてみたら、その要素が入つた違うテーマの文章になっていました。でもそのほうが、よい文章になれたのではと思いました。

⑳プレッシャーに弱い。人から見られることも苦手だ。

次に、この①～⑳までの素材を、内容が似ているものに分けてもらいました。

- ①両親とその影響 ②⑨⑬⑯
- ②一人が好きでラク ①④⑫⑬
- ③話すこと、聞くこと ⑧⑮
- ④自分の性格プラス編 ③⑦⑮
- ⑤自分の性格やマイナスイメージ ⑤⑥⑮
- ⑥自分の性格こんな面もあり編 ⑪⑭⑲
- ⑦運命について ⑩

次に、この①～⑦を適当に並べ（同じ



グループ内の順番も前後のグループとのつながりを意識して適当に入れ替え、草稿を作ってもらいました。

私は、一人で過ごすのが好きだ。「うちカフェ」に安らぎを感じる。

団体行動が、昔から嫌いなのだ。腹立たしさを感じるほど。

つまり、私には協調性がない。「集団」になじめず、疲れていた時期もあったけれど、あるとき、無理して合わせることはないと気づいた。それから、最初から属さないとか、近寄らないなどの方策を自分で取るようになった。私は、子どもの頃から内気だったから。三つ子の魂百までだ。

だから私は、自分が話すよりも、人の話を聞いてしまうタイプだ。

人の意見はもちろん、相手の提案や誘いも、なかなか断れない。もっとも今は、聞き役が大事だという風潮になっていて、結果としてよかったのかなと思う場合もあるけれど。

そんな私の長所はまじめなこと。でもこれは短所でもある。たいていの場合は、プラスになるのだけど、一人で雰囲気壊しているかなと思うこともある。

度胸があるということも、長所だと思っている。

一方、マイナス面は、どちらかとい

えば悲観的ということ。

自分に対する否定の言葉には弱い。すぐに傷ついてしまう。どんな小さな言葉でもダメで、「冗談の話でも、本当だろうか、と考えてしまうほど。

そして、そんなことを、いつまでもくよくよと考え続けてしまうのだ。

ほかには、好き嫌いが極端だったり、プレッシャーに弱く、人から見られることが苦手という面もある。

「ちよつと変わった性格」と言われることもある。

自分というの何だが、老成している私。子ども心に、父親の言動を、理不尽だなと思っていた。そのせいだろうか。

自分に対する自信のなさも、両親に愛されていると自覚できなかったせいかもしれない。

老成した私が思うこと。それは「運命はある」。自分の力ではどうにもできない大きな流れは、絶対にあると思っている。悲観的な私も、楽観的な夫に流れつき、今は楽しく暮らしている。

グループ分けしたものを適当に並べただけですが、文章っぽくなっています。

では、流れがおかしいところなどを修正し、加筆したり削ったりし、最終的に文章として完成させてもらいましょう。それが下記の作文です。

一人の時間に思うこと

鈴木百合子

私は一人で過ごす時間が好きだ。

夫も子どももない日中、一人でコーヒーを入れ、ちよつとしたスイーツをつまみながら新聞をめくるといった「うちカフェ」の時間に至福の安らぎを感じる。仕事を持ち、子どももまだ手がかかって、自分の時間などほとんどとれない私のたまの息抜きだ。

一人が好きなのは、当然、団体行動がきらいだ。協調性がないのだと思う。「集団」になじめず、疲れていた時期もあったけれど、あるとき、無理して合わせることはないと気づいた。それから、最初から属さないとか、近寄らないなどの方策を自分で取るようになった。子どもの頃から内気だった私。三つ子の魂百までだ。

私は、人との会話においても、自分で話すより人の話を聞くことのほうが多い。相手の意見はもちろん、提案や誘いをなかなか断れなかったりすることもある。もっとも今は、聞き役が大事だという風潮になっていて、結果としてよかったかなと思

うこともあるが。

そんな私の長所はまじめなこと。でもこれは、短所でもあるかもしれない。たいていの場合はプラスになるが、私がまじめに取り組んでしまいうため、周囲もそれに合わせなければと緊張した空気になってしまつて、そんなときは、場の雰囲気を一人で壊していることを申しわけなく思ったりする。

性格のマイナス面は、物事を悲観的にとらえてしまうこと。自分に対する否定の言葉にはめっぽう弱い。すぐに傷ついてしまう。どんな小さな言葉でもダメで、「冗談の話でも、本当だろうか、と考えこんでしまうほど。そしていつまでも、くよくよと考え続けてしまうのだ。

しかし、世の中はバランスよくできているもの。悲観的な私だが、超がつくほど楽観的な夫と知り合った。自分の力ではどうにもできない大きな流れ、「運命」と呼ばれるようなものは絶対にあると思っている私。夫に流れつき、子どもにも恵まれて、楽しい毎を送っている。

今回の「うちカフェ」開催を楽しみに、本日の店をたたむ私は、すっかり楽観的になっている。



よく耳にするあの言葉 文章の四大奥義を検証する

「よく考えよ」「読め」は妥当

思いつくまま文章の奥義を挙げると、「書く前によく考えよ」「名文を読め」「うまく書くこうとするな」「話すように書け」があります。

「書く前によく考えよ」については全く異論がないでしょう。なんの構想も練らず、いきなりノープランで書き出してもうまくいかないでしょうし、抽象構成作文法で言えば、メモをたくさん出しておくに越したことはありません。

「名文を読め」ももったもなことでしょう。書かれた言葉を読む経験なしには、読むことはできません。

名文がわれわれに教へてくれるものは、第一に言葉づかひである。われわれはそれを意識の底に数多く蒐集しておき、時に応じて取出しては自在にこれを用ゐることが出来る。すなはち、先人の語彙、過去の言ひまはし、別の文脈のなかでのレトリックは、今われわれの文章を織るための糸となる。

（丸谷才一『文章読本』）

ただし、丸谷才一によると、必ずしも誰もが認めるような名文でなくてもいいそうです。

ところで、名文であるか否かは何によつて分れるのか。有名なが名文か。さうではない。君が読んで感心すればそれが名文である。たとへどのやうに世評が高く、文学史で褒められてるやうと、教科書に載つてゐようと、君が詰らぬと思つたものは駄文にすぎない。

（丸谷才一『文章読本』）

難解な文章は悪文

次に「うまく書くこうとするな」ですが、これには二つの解釈があります。

その前に「うまい」の意味ですが、初心の方に多いのが、難解な文章がいい文章だと思つてゐること。口に出してこそ言いませんが、書くとなると、とたんにふだんは使わないような言いまわしをしたりします。「畢竟」とか。

やたらめつたら漢字を使うパターンもあります。「漢字＝男の文学、フォーマル」と「ひらがな＝女の文学、カジュアル」と

寺尾康先生インタビュー

話すことと

書くことは違う

文章指南書には、よく「話すように書け」と書いてありますが、そううまくはいきません。その理由について、静岡県立大学の寺尾康先生にお伺いしました。

——書くことと話すことは違いますか。

【寺尾】両者は言語のアウトプット、という点は同じなのですが、かなり異なった面を持っています。世界中の言語を見渡してみたとき、話し言葉を持たない言語はありません。一方、書き言葉を持たない言語は無視できないほどあります。赤ちゃんは放っておかれても（養育放棄は除きます）流暢な話し手になりますが、幼児、小学生は放っておかれたら良い書き手になりません。もっと大げさに言つてしまえば、「我々ヒトは、何百万年もかけて話し言葉を獲得し、言葉を話すことの一部は本能である」のに対し、書く能力は「せいぜいここ五千年ほどでようやく手に入れた、文化にも教育にも依存する、完全に身につけていないスキルではない」となります。

——書きなれない人は、「話すことはできるのに、なぜ書けないのだろ」と言つたりします。話せるのに書けないのは、どうしてだと思われませんか。

【寺尾】問いの中に答えがあります。「書き

寺尾康（てらお・やすし）静岡県立大学国際関係学部国際言語文化学科教授。専門分野は、心理言語学、音韻論、認知科学。『言い間違ひはどうして起こるのか』（岩波書店）など著書多数。

なれていない」からです。「書き方」を知らないからです。私たちは個人の一生というレベルでも、人類の進化というレベルでも「書きなれて」いません。話すことは本能ですが、書くことはスキルの習得です。そしてその習得には文化や教育が大きく関わってきます。「書き方」は学ばなければなりません。普通の話し手になるのに努力は要りませんが、普通の書き手になるには努力が必要なのです。では「言語技術（language arts）」の名で知られているものにヒントがあるのであれば「書き方」が考えられます。ものごとの分析の仕方、解釈の仕方、表現の仕方はいわば「作法」があります。その作法を身につけさせることが言語技術教育の主眼なのですが、自分の書きたいものを分析し、相手にとってわかりやすいように配列する技術の基礎を意識できるようにすることは「普通」の書き手になるための第一歩だと思います。

——書ける人でも、肩肘を張つたり、力

いう印象があるのかもしれませんが、それは戦前までの話ですね。

「うまく書くこうとするな」の一つの解釈は、まずはこのようなうまい文章（実はちっともうまくない）を書くなという意味です。

もう一つは、肩の力を抜いて書けという意味。たとえば、「歴史に残る名文を書いてください」と身の丈以上の能力を要求されたら、誰だって委縮してしまいますし、それでは実力の半分も出ません。「うまく書くこうとするな」は実力以上のことを書くこうと力むなという意味であって、決して「下手に書け」ということではありませんね。

話すときのよい気楽さで

最後は「話すように書け」。これも多くの作家がそう説いています。

井上ひさしは著書『自家製文章読本』の中でこれを否定したうえで、「話すように書け」と言われるようになった原因として、以下のような先達の言葉を挙げています。

林芙美子が、本郷菊坂ホテルに宇野浩二を訪ねて、小説の書き方について質問した時「当人のしゃべるように書くんですよ」と宇野さんがこたえた話は有名である。ほくも宇野さんからじかにその話を聞いたが、宇野さんはほくには「しや

べるとおりの書き方の元祖は武者小路実篤ですね」といってから、「しかし、調子が出たらペンは置くことですね」といわれた。またこの「調子が出たら」のつぎに「葛西善蔵はそれをしよっちゅういっていました」ともいわれた。

（水上勉「語り、文体それから」）

文字でする表現即ち文章と、言葉で以てする日常の談話の表現とに何か本質的な相違があるかのやうに考へるのが抑の迷信なのである。言葉の通りを文字にしたものそれをそっくり文章と心得て差支へない。

（佐藤春夫「法無法の説」）

江戸時代までは言と文が違い、その後、言文一致運動を経て言文が一致しましたが、「話すように書け」にはそうした思想の影響もあるようですから鵜呑みにはできません。

また、会話を録音して筆記すれば分かるのとおり、話し言葉と書き言葉はかなり違い、話したとおりに書いたらおかしい文章になってしまうはずで、その意味では話すようには書けません。

では、「話すように書け」はどういう意味なのでしょう。それは「うまく書くこうとするな」と同じく気構え、つまり、話すときと同じような気楽さでという意味だと考えられます。

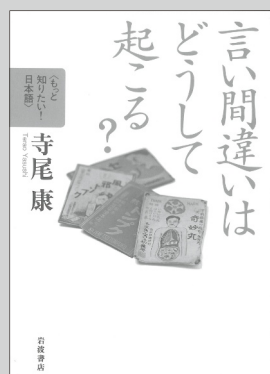
んだり、あるいは、委縮したりすると、頭が真っ白になって言葉が出てこなくなったりしますが？

【寺尾】 そもそも書くという行為には「肩肘はらせたり」「力ませたり」「萎縮させたり」する要素があるのだ、という観点から書きます。

（１）話し言葉と違って、書き言葉はあとから修正が可能です。言い間違いは消せませんが、書き間違いは消しゴムで消すことができます。ですがその反面、書いてしまつて手元を離れたものはいつまでも残ります。この「残ること」への恐怖が様々な神経的・精神的な負担となつて書くことにストップをかけると考えられます。

（２）話し言葉と違って書き言葉には「あそび」の部分が許されません。同じ表現をくどくど繰り返すことや「えーと」、「あのー」等の意味のないフィラー語をはさむことは話し言葉では自然ですが、書き言葉ではそれらを除いたスッキリとした形が求められます。話し言葉ではあまり必要とされない、要約を行うためのモニターも働かせなければならぬので、負担オーバーになつて書けなくなることもあります。

（３）書き言葉にはイントネーションやポーズといった韻律的な特徴が乏しいうえに、読み手から反応をもらうまでの時間が長いので、書き手は話し手のように



寺尾康著『言い間違いはどうして起こる？』（岩波書店）

「時々刻々、目の前の相手の反応をみて、微妙な調整をしながら言葉を紡ぐ」ことができません。かなりの書き手であつても「孤立から来る不安」からは逃げられないように思います。

（４）ある言葉がどの元まで出かかつているのに出ない、という状態があります。意味やイメージ（名前が出てこない人の顔など）ははっきりしているのに、なぜか言葉が思いつかなくて、もどかしい思いをします。これは私たちの頭の中の辞書のエントリーが単純な形をしているのではなく、意味・文法部門と、形・音部門に分かれていて、語を引き出そうとしたときに意味・文法部門にアクセスできているのに形・音部門にはアクセスできない場合が起こると言われています。書くこうとして言葉が出てこない、という場合もこれと似た現象かもしれません。伝えたいメッセージははっきりしているのに、それを載せるのにふさわしい文型や言葉の選択で、アクセスが部分的にしかできていないというわけです。